



感染症とたたかう

第19号

2017年
6月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

子どもの体に水ぶくれが広がる

「とびひ」 皮膚を清潔にし、 抗菌薬を塗って治療



とびひは、正式な病名を「伝染性膿痂疹（でんせんせいのうかしん）」といいます。細菌による皮膚の感染症で、接触によってうつり、水ぶくれ（水疱）を本人が掻きむしることで、全身に水ぶくれが広がります。その様子が火事で火の粉が飛び火することに似ているため、「とびひ」と呼ばれます。

正式病名は「伝染性膿痂疹」 黄色ブドウ球菌の毒素が原因

とびひの原因となる主な細菌は、黄色ブドウ球菌や溶血性連鎖球菌（溶連菌）で、どちらも健康な人の皮膚や鼻の中の粘膜にいる常在菌です。こ

れらの細菌が、虫さされやあせもを掻いたり、皮膚にできた傷口から入り込み、とびひとなります。

とびひには「水疱性膿痂疹」と「痂皮性膿痂疹（かひせいのうかしん）」の2種類があります。前者は乳幼児がかかりやすく、夏に多いのが特徴です。とびひの多くはこのタイプで、黄色ブドウ球菌が原因です。かゆみを伴う透明な水ぶくれ（水疱）ができ、それがだんだん膿（うみ）を持つようになります（膿疱）。水疱や膿疱は破れやすく、掻きむしると皮膚がただれます。水疱の中の水やただれた皮膚から染み出す液には黄色ブドウ球菌の毒素が含まれており、それが周囲の皮膚に広がり、次々に水疱ができていきます。

「痂皮性膿痂疹」は最初に皮膚が赤く腫れ、そこに膿をもった水ぶくれ（膿疱）ができ、やがて破れて厚いかさぶた（痂皮）になるタイプで、溶連菌が主な原因です。炎症が強く、リンパ節が腫れたり、発熱やのどの痛みを伴うこともあります。重症になると菌が産生する毒素によって猩紅熱（しょうこうねつ）のように全身が真っ赤になる場合があります。季節に関係なく発症し、子どもより成人に多いとびひです。



早めに皮膚科や小児科を受診 掻きむしらないよう、注意を

とびひの治療は、主に抗菌薬（塗り薬や飲み薬）によって原因となる細菌を退治します。症状が広がらないうちに治療を始めると早く治せるので、皮膚に水ぶくれができたなら、早めに皮膚科や小児科を受診しましょう。症状が悪化すると治りにくいというえ、感染力が強いため、家族や友だちにうつしてしまうことになりかねません。

きちんと治療すれば基本的には1週間程度で治まります。ただし、症状がよくなってきたからといって薬の使用を途中でやめてしまうと再発したり、感染を広げたりする可能性があるため、医師の指示に従って、最後まで薬を使い切るようにします。

塗り薬は、殺菌力のある石けんで水ぶくれの部分をよく洗った後に、清潔なタオルで水気を十分に拭きとってから塗ります。指で直接塗ると、指に細菌がついてほかの場所にうつす可能性があるため、綿棒を使って塗ります。薬を塗ったあとは、ガーゼや包帯で覆ってください。患部を保護しておかないと、寝ている間に掻きむしったり布団でこすったりして、水ぶくれが破れ、ほかの場所に感染が広がる場合があります。

痂皮性膿痂疹は溶連菌だけでなく、黄色ブドウ球菌にも同時に感染していることが多いので、両方の菌に効く抗菌薬の飲み薬や塗り薬で治療を行います。重症の場合は点滴などで薬を投与することもあります。

石けんでていねいに洗い、肌を清潔に 爪はこまめに短く切っておく

とびひになったら、原因となる細菌を減らすため、皮膚を清潔に保つことが大切です。1日1回は、石けんをよく泡立てて、こすらず泡でやさしく洗い、シャワーで洗い流します。タオルは家族と別のものを使うようにします。

子どもはかゆいと無意識に掻いてしまうので、爪はこまめに短く切りましょう。また、鼻の中には、とびひの原因となる細菌がたくさんいるので、鼻の中をいじらないようにすることも、感染を防ぎ、広げないことにつながります。

なお、プールや水泳は、症状を悪化させたり、友だちにうつしたりする恐れがあるので、完全に治るまでは禁止です。

次号（2017年7月号）では「耐性菌と私たちの暮らし」を取り上げます。